

Soya Labo10 ミーティング 議事録

■開会挨拶 稚内開発建設部 次長 松本 一紀

本日はご多忙の中、そして、雪の大変強い中、ご出席いただきまして、誠にありがとうございます。

この宗谷 Labo10 ミーティングには当会場にお集まりの皆様とWEBで参加していただいている皆様、そして、オブザーバーとして、宗谷総合振興局の皆様、育英館大学、佐賀先生のほか、総勢 14 名の皆様にご出席をいただいております。

先ほど、司会の杉谷様からご説明の通り、本ミーティングは昨年度まで開催していた宗谷版北海道価値創造パートナーシップ会議を発展的に見直したもので、宗谷地域を構成する 10 市町村の皆様と共に盛り上げていきたいと考えております。この機会に宗谷 Labo10 ミーティング。覚えていただきやすいように Labo10 とさせていただきます。今後ともご愛顧のほど、よろしくお願いしたいと思います。

さて、私ども国土交通省北海道開発局は令和 6 年 3 月 12 日に閣議決定されました第 9 期北海道総合開発計画の下に事業を推進することとしておりまして、稚内開発建設部は昨年 10 月 8 日、稚内総合文化センターにおきまして、地域の理解と振興を目的として、シンポジウムを開催しました。

このキックオフミーティングには会場におよそ 100 名、WEB の視聴者を 300 名を超える皆様に参加していただき、宗谷管内の高校生が考える明るい未来をテーマとして、パネルディスカッションなどを行って、9 期計画を推進していく契機としたところです。このシンポジウムは、来年度以降も継続することとしております。

こうした取り組みを踏まえまして、本日の Labo10 ミーティングの開催に至ったわけですが、Labo10 ミーティングは地域で活躍されている民間の方々。まさに本日、お集まりいただいた皆様を中心に意見交換を行っていく場として設けさせていただいたところです。

冒頭にも申しましたけれども、本日、皆様にご発言いただくテーマは 2 つあります。若者呼び戻すための魅力ある宗谷の地域づくり。そして、管内の高校生に聞いてみたいことです。

昨年開催したシンポジウムに続きまして、管内の高校生や若い世代をテーマの中心として考えていきたい。シンポジウムの取り組みを一過性で終わらせることなく、継続して取り組んでいきたいという思いですけれども、詳細については後程、当部地域連携課からご説明させていただきます。

最後になりますけれども、私ども稚内開発建設部といたしましては、引き続き、宗谷地域におきまして、宗谷総合振興局様をはじめ、管内 10 市町村の行政機関の皆様はもちろん、NPO、各企業団体、教育関係者様による連携体制を築いていくことが 9 期計画を推進していく上で大変重要であると認識しております。ここから北海道の価値を高めるための官民共催、共に創っていくという取り組みにつながっていくものと考えています。

本日の Labo10 ミーティングにつきましては、こういった趣旨で開催させていただくものです。本日は限られた時間ではありますが、参加された皆様には自由な、またさまざまな視点からご発言いただき、有意義なひとときになるよう、よろしくお願いいたします。

■趣旨説明 稚内開発建設部地域連携課 課長 吉田賢正

私の方から、資料プログラム 03 に沿って、会議の趣旨含めて、説明させていただきます。

まず、1ページ目、稚内開発建設部の紹介からさせていただきます。稚内開発建設部は国の機関になりまして、国土交通省の組織の 1 つになります。全道に旭川、函館、釧路など主要都市に 10 個の開発建設部がありまして、その 1 つとして、稚内開発建設部があります。管轄は宗谷総合振興局さんと同じように、宗谷管内の10市町村になります。

何をやっているかと言いますと、基本的にはインフラの整備がメインとなります。1 ページにあるように、稚内は河川事業はありませんが、全道的には河川の事業をやったり、道路の整備や港の整備ということで、直近では国道 238 号の猿払辺りで、防災事業を開通したり、港では稚内港や枝幸港、農業では勇知地区や幌延地区などを整備している組織になります。

2 ページ目、3ページ目ですが、インフラ整備がメインとは言いながら、近年は地域とのコミュニケーションにも力を入れておりまして、シーニックバイウェイや「わが村は美しく」といった取り組みも行っています。我々の地域連携課は4名の部署になりますが、まさにこの部署が地域とのつながりをつくっていく取り組みをしているところです。

開発局はこういった取り組みをしているのですが、何を基本にこういった行動をしているのかについては、資料の 4 ページ目以降の第 9 期北海道総合開発計画。元々、この総合開発計画は昭和 26 年につくられまして、おおむね 10 年をスパンに計画を作成しております。これは閣議決定されているものですが、第9期の総合開発計画は令和 6 年 3 月に閣議決定されたところで、基本的にはこれをベースに事業を展開しています。

そもそも総合開発計画というのは北海道だけ、少し特殊な地域になるのですが、北海道の発展が国の利益につながるということで、国土交通省の中では全国の地域と異なる組織体制となっています。北海道の資源、特性を生かして、我が国が直面する課題の解決に貢献すると。地域の活力ある発展を図るために、この総合開発計画がつくられています。先ほどお話ししたように、おおむね 10 年をスパンに考えています。

内容は資料 5 ページに記載の通り、まず北海道のポテンシャルはどういうものかという、やはり高い食料供給力、魅力的な観光資源、そして、豊富なエネルギー資源といったところが挙げられています。

その下に北海道の地域構造ということで、そもそも北海道の価値を生み出しているものは何かという、生産空間と位置付けておりまして、この生産空間が北海道の価値を生み出しているという位置付けになっています。

5 ページの右側の計画の目標ですけれども、まず 2050 年の北海道の将来像を見据えて、目標を 2 つ掲げております。1つ目が、我が国の豊かな暮らしを支える北海道。そして、2 つ目が北

海道の価値を生み出す北海道型の地域構造になります。

これをどういった形で進めていくのかというのが、計画の進め方に記載している共創という、共に北海道の未来を創るということで、先ほど松本次長もおっしゃられた通り、行政機関だけでは進んでいかない。行政機関が連携することはもちろんですけども、民間の方々とも連携しながら進めていくことが計画の進め方として掲げられています。

資料の 6 ページ、7 ページに計画を進めるに当たっての各目標に対する主要な施策として、例えば、6ページには食料の安全保障を支える農林水産業の持続的な発展ですとか、観光立国を先導する世界トップクラスの観光地域づくりといった施策が掲げられています。

簡単に北海道総合開発計画についてお話しさせていただきましたが、この 3 月に第9期の北海道総合開発計画が閣議決定されたことを受けまして、資料の 8 ページにあるキックオフミーティングを昨年 10 月に開催しました。これは9期計画ができたことを地域に浸透させることを目的に開催したのですが、内容は右下にあるように、9期計画の説明や振興局さんからは北海道総合計画の説明をいただきまして、さらに大学の先生から北海道開発のあゆみとこれからについてご講演をいただいて、パネルディスカッションを行ったところです。

9期計画自体は先ほど 2050 年の話が出ていましたが、結局のところ、若い世代がどういうことを考えているかを地域として、正確に把握した上で取り組んでいくことが重要と考えまして、高校生をターゲットにして、このイベントを開催しました。このポスターも管内の高校生に公募したところ、大谷高校の生徒さんのデザインを採用させていただきました。

高校生の考えていることをどういうふうに把握できるかについて、いろいろ考えて、簡単なアンケートを実施しました。アンケートの結果が資料の 10 ページ以降。

管内全部で 8 校ありまして、人数では 1143 名の生徒さんに実施しました。簡単にアンケートの結果を説明しますと、まず 11 ページで、「地元が好きですか？」の問いに対して、好き、普通も含めて、嫌いな人はほとんどいませんでした。多くの方が好意的な印象を持っていました。

12 ページの「地元に対するイメージはどうですか？」の問いには、自然豊かな街、漁業の街というイメージを高校生は抱いていて、「地元になんかあればいいですか？」という問いには、やはり高校生は娯楽施設や商業施設、飲食店が欲しいということで、具体的にはイオンやコストコ、スターバックスといった施設を望んでいました。

資料の 14 ページ、「いずれは帰ってきますか？」。これはまさに今日の意見交換のテーマにつながるものですが、高校を卒業して、進学や就職して、一度地域を出る方が多い中で、「いずれ帰ってきますか」という問いです。

今の段階で、帰ってくると考えている方と迷っている方を含めて、75%ぐらいはポテンシャルとして、U ターンの可能性があるという結果でした。理由を見てみると、やはり地元が好きだからという単純な理由の方が多かったです。

資料の 15 ページは、「王様だったら何をしますか？」ということで、野球チームを作りたいなど、高校生らしい答えがありました。

アンケートの結果の概要はこのような感じですが、資料の 16 ページにはキックオフミーティング

の概要ということで、パネリストの方 4 名からも、飲食店やショッピングセンターといった、地域の供給力を高めることが若者の流出を食い止めるのではないか。地元が好きと思えることが大事なのではないかといった意見をいただきました。

パネルディスカッションの最後にはこういったイベントを継続的に行っていくべきという提言をパネリストやコーディネーターの高橋先生からもいただきまして、キックオフミーティングのパネルディスカッションを終えたところです。

今日の Labo10 ミーティングはこのキックオフミーティングを補完するというか、並行する形で開催してもらいましたが、会議の立ち位置としては、資料の 18 ページ。最後のページの一番上に Labo10 シンポジウムと書いてありますが、これは先ほどのキックオフミーティングのことで、来年度以降も Labo10 シンポジウムとして、来年度以降も継続していくつもりです。シンポジウムなので、地域のいろいろな方々に来ていただいて、発信する場として開催するのですが、今日の Labo10 ミーティングはこういった地域で活躍されている方々にお集まりいただいて、自由な意見を言っていただく場として設けています。

この内容を例えば、シンポジウムの中でさらにパネルディスカッションのテーマとしてみたり、真ん中にあります宗谷地域づくり連携会議という、これは振興局さんや、育英館大学さんも入っている地域づくりに関する会議ですが、管内の 10 市町村の首長さんが集まる会議です。

なので、今日、お話しいただいた内容を地域づくり連携会議のテーマとして、首長さんたちに議論していただくような 3 つの柱を連携させて取り組んでいきたいと考えています。

今日、お集まりいただいた方々は個別にいろいろと事前にお話しさせていただいていますが、やはり会議をやって終わりというのは好ましくないと、我々もそのように思っていますので、いただいた意見で行政機関として取り組めるものもあれば、民間の方々と連携しなくてはいけないものもあると思いますが、何かしら、そういった形に結び付けていくことが目的で、それがいわゆる共創につながっていきます。Labo10 ミーティングについては、そういった立ち位置で、意見交換いただければと思います。

続いて、今日、意見交換していただくテーマですけれども、若者を呼び戻すための魅力ある宗谷の地域づくり。これを実践していくために必要だと思うこと。意見交換の資料の 2 枚目に管内の高校生の現状をまとめたものを簡単に付けております。

前提として、管内の高校生が何人ぐらいいるかということですが、令和元年から 5 年まで、3 年生で 400 名前後。卒業生が 400 名前後とした時に 7 割ぐらいが進学、3 割ぐらいが就職。例えば、稚内高校、大谷高校に確認したところ、昨年度ベースで、稚内では 8 割、2 割ぐらいの数字ということで、進学するとなると、ほぼほぼ管外に行く、就職するとなると、近年はほぼほぼ管内で就職する高校生がほとんどだとお聞きしました。

行政として、そういった人を呼び戻す施策はどんなことをやっているのについては、下の方に書いているジョブフェアや高校の就職の支援事業、保健師のための貸付など。これは各自自治体でいろいろとやっていることだと思いますので、全部は記載していませんが、稚内市さんの取り組みを簡単に記載しています。

資料にはないですが、昨年 12 月には稚内信金さんのてっぺん塾という組織が稚内大谷高校の生徒さんと、まさに今日、お話しするような意見交換を実施したり、振興局さんでも地元就職するような要請を業界団体にするといった実態はあるのですが、そういったところとつながる形で、稚内開発建設部として取り組んでいきたいということで、意見交換の場を設けさせていただきました。

■意見交換 司会 FM わっぴー 取締役局長・稚内地区吹奏楽連盟理事長 杉谷 賢俊 氏
(以下、杉谷)

Round01 「若者を呼び戻すための魅力ある宗谷の地域づくり」、これを実践していくのに必要だと思うこと

杉谷: それでは、今説明があった宗谷管内の高校生の現状も踏まえて、意見交換を始めたいと思います。

まずは若者を呼び戻すための魅力ある宗谷の地域づくり。これを実践していくのに必要だと思うこと。これについて、それぞれ活動を行っている皆さんの立場から、お1人4~5分程度で、お話ししていただきたいと思います。

尾崎: アンケートの結果を踏まえて、7割 5 分の子が稚内に帰ってくる可能性があることはすごく大事なポイントだと感じています。やはり、子供たちがどのような形で帰ってきたいのか。帰ってくる場所があるのか。そのあたりも今後、考えていかなければと思っていました。

私自身も二男が今年の春に大阪から帰ってきて、稚内で就職するのですが、そのようなこともあって、いろいろ考えていました。今これから、いろんな形で仕事場が変わっていくのではないかと考えていて、逆に変わらなければならないのではと思っています。それは、こういう形で帰ってきたい子がいるけれど、実際は帰ってこない。それはなぜかとなると、やはり仕事がない。やりたいことができないといったことではないかと思っています。

今後はそれをこちら側で作っていく仕組みをつくらないと、なかなか帰ってくる子供たちが少なくなる。ある意味、帰ってくる条件を整える必要があるのではないかと考えています。

例えば、うちの息子は高校から稚内を出て、本州に行っていましたので、今回、大阪から稚内に帰ってくるとなった時に自分が積んだキャリアを地元で生かしたいと言っていました。息子はバスケットをやっていまして、バスケットで恩返しをしたいと話していたのですが、フィールドがない。そこでご飯を食べていくようなものもない。じゃあ、ボランティアでやらなければならないのかとなってくる。

また別の話になりますが、これから地域移行ということで、部活が先生の手を離れて、地域の方たちでやってくれないかという話が進んでいくと思うのですが、そんな中で、結局、ボランティアでやらなければいけないのかとなると、できなくなっていくと思うんです。

そういう意味でも、そういった新しい仕事をつくるのか、新しい働き方の環境づくり。例えば、社

員でもフルタイムで働くのではなく、6時間、5時間の社員がいてもいいのではないか。その早く帰った後、地域移行に協力する。そのような形を取っていくと、会社としても8時間じゃなく、6時間分の給料で済むと。本人もやりたいことがやれて、地域移行からの収入も見込める形が取れば、少し変わった、今までとは違う形をつくっていかなければ、この75%の子供たちにこの地域に住んでもらうことが厳しくなってくるのではないかと。いち早く、こういうことに取り組む地域が増えていくのではないかと感じています。

正直、僕は急務だと思いますが、これは早く、行政、民間、市民も合わせて協力して、そういった形をつくっていかないと、やはり市としてはどんどん人が減っていく。働き手がいなくなってしまう。働いてほしいと思っている会社はたくさんあるのに帰ってきてくれないというような悪循環が続くと思うので、これは実行しなければいけない時期に来ているのではないかと感じています。

杉谷:今のお話の中で、Uターン組をどうやって戻すかはずっとテーマだと思いますが、今、キャリアを生かしたいというお話がありました。これは本当にいい話だと思いました。キャリアを生かすためにはどういう受け入れ先があるのかを我々は考えなくてはいけないのかなと思います。

今、たまたま地域移行の話が出ましたが、僕も稚内の地域移行の検討会に入っているのですが、非常に難しい問題で、指導者がいない、ボランティアでやらなければいけないということがあります。でも、そういう経験をされた方で、戻ってきたいと思っている方は結構いるのではないかと感じています。

それと、今、尾崎さんが言った働き方を変える。Wワークを推奨するじゃないですが、そういうのも1つの手ではないかと思いました。

富田:稚内市歴史・まち研究会の立場で参加していきまして、少し会の紹介をさせていただきますが、私どもは非常に地味な活動をしておりまして、市内に残る貴重な建物を保存・活用していかないとということをやっています。

建物は壊されて、更地になると、あっという間にそこに何が建っていたのか、忘れられてしまうということもあったので、貴重な建物を1つでも2つでも何とか残していけないかと、活動を続けています。

最初は市の中心部にある旧瀬戸邸から始まりまして、その後、稚内空港の少し奥の京北地区にある旧海軍の送信所を中心に活動しています。この建物はガリレオガリレイの最初のプロモーションビデオの撮影でも使われましたし、つい最近のPVにも使われた建物ですが、そういう建物の保存活動をしていく中で、必要に迫られて、この地域の歴史を学ぶ機会が多くなりました。そうすると、この稚内にもしっかり歴史があることがわかってきまして、個人的な考えですが、どきんこは学校で日本の歴史を学んでも、北海道のことはほとんど出てこないもので、自分の地域には歴史がないと思いついてしまいがちですが、実はそんなことはなく、稚内にも1万5000年前に人が住んでいた歴史もありますし、江戸時代から国境という特殊な場所であるがゆえの歴史が連綿と続いている事実もあります。そういうことを歴史的建造物の建物を通して、子供たちに伝えていくこと

で、少しでもふるさとに対する愛着を持ってもらえればという思いで活動をしています。

ただ、アンケートの結果を見ると、高校生は地元が好きという方が思ったよりも多い感じなので、自分が住んでいるところの歴史や経緯を知ってもらうことで、もっとこの比率を高めていければと思っています。

杉谷:今、学校のほうでも地元を知ろうという教育が増えてきています。それはすごく素晴らしいことだと思っています。

福間:私はスーパーマーケットを経営しているので、食の立場からお話しさせていただきます。

まず、高校生のアンケートで、スターバックスやケンタッキーが欲しいというのは食の貧困化でしかないというか。味覚がもう、利尻昆布のおいしさがわからないのが、まず地域の問題だと考えます。

昆布は世界に誇る、旨味という言葉が世界に行っているぐらい価値のある生産物で、このエリアの未来にポテンシャルのある生産物だと思うのですが、スーパーマーケットをやっている、基本的にみんな、顆粒だしを買っていく。家で昆布でだしを取る文化がそもそもない。生産地でありながら、昆布を使わない食生活に日本人自体がなっているので、管内のポテンシャルは一次産業と観光しかないと思うのですが、観光の人たちが何を求めているかといえば、私は友人を招いた時に宗谷丘陵と日本食しか、おもてなしするものがないと思っているんです。

なので、やっぱり日本食に対して価値を求めてくるのに、そこにスタバとケンタッキーを誘致してどうするのと。非常に日本人の考え方が矮小化しているというか、外資にお金を落とすことにも何とも思わないし、Amazon だ、Netflix だど使いまくる国民性になってしまっているので、今からそれをどうこうするのはなかなか難しいですけれども、結局は教育しかないんじゃないのかなど。目先のインバウンドの人をどうするというのではなくて、30 年後に宗谷丘陵を残すにはどうしたらいいか。

私は基本的に風力発電にも反対というか、建て過ぎだと思っていて、限度はあると思うので、景観こそが世界に誇るべき宗谷の価値だと思いますし、昆布に対しても、函館は行政ぐるみで食育活動をしていますし、根付いているかはともかく、教育に食の時間をかなり割いているのに、我々はそういう教育を受けたこともないですし、せいぜい牛乳を飲むぐらいで、それは根本的な食のことを伝えることにはなっていないのではないかと思います。

そこに誇りを持って初めて、自分は一次産業に従事してみようとか、本当にシェフというか、本物の料理を地方で伝えてみようとか、そういう発想になっていかないと思うんです。だから、いつまでもたっても本物がなくて、要するに化学調味料だったり、旨味を足した食べ物に甘んじなくちゃならないのが、最大の地域の課題かなど常々感じています。

杉谷:福間さんからは食の貧困化というキーワードがありました。ただ、僕の世代は給食で地元のものというのには本当になかったです。今は少しずつ増えてきているようにですけど、改めて、

宗谷の学校などは結構、積極的にやっているでしょうけれど、地場産のものがどれだけすぐれていて、どれだけおいしいかという教育は確かに少ないのかもしれない。

法人会の周年事業で、チームナックスの森崎さんの講演を聞かせてもらったのですが、幕の内弁当の写真があって、それを消していくと、道産品がお米と何かしか残らないような。サケも輸入品でというのがあって、愕然としたのですが。そういう意味では僕らも知らないことがたくさんあるし、食育のキーワードもあるのかなと思いました。

田中: 豊富町で主人と酪農業と、第1次産業、第2次産業、第3次産業と全て営んでいます。これはすごく大変なことではあるのですが、全ての人の気持ちをわかるために小さくても続けています。今後も規模縮小したりして、頑張っ続けていこうと思います。

その中で一番は豊富町の基幹産業である酪農業をこれからも残していきたいと思っているんですけど、なかなか物価高で、新規就農するのも大変な時代になってきて、今、営農するのもすごく大変な時代になっています。

でも、まず一番は新規就農以上に地元の人が酪農業に帰ってくる U ターンにお金をかけることが重要なのかなと、町長や主人とも話しています。そこが一番ロスがないというか、じゃあ、どうやって持ってくるかという、そこをまず魅力的にすることに今、力を入れています。

例えばですけど、同じように豊富の高校生に何が欲しいと聞いたら、イベントが欲しい、お祭りをやりたいと。どんどん人が減っていくと、お祭りを準備する人も減って、資金もない、時間もない、来る人も少ないなど、いろんな問題が起きていて、どんどんイベントが減っているんです。それをコロナの後には町全体で若い人が集まって、イベントを再復活させました。

この地域もそうだと思うんですけど、例えば JA だけじゃ絶対、成り立たないし、商工会だけでは成り立たない。観光協会だけでは成り立たない。やっぱり、これからは全部の産業が一丸となって、連携していくことが大事だと考えています。それをみんなの共通認識にして、みんなで仲良く、いろんな意見を交えて、どんな産業まつりもみんなで協力していこうというふうにやっています。

そのためにはみんなで仲良くすることも大事だし、いろいろ、みんなを認め合って、いろんなことをやって。さっき、福間さんが言っていた価値を高める教育って、私もすごい大事だと思っていて、うちの上の子が次、中学生になるんですけど、前から説明してもスタバには行きたいんですけど、知らないのって、違うと思うんです。知った上で、自分が選ぶ。いいものは分かっているけど、たまには行きたいと思うので、そういうのをちゃんと教育する。それも豊富町でもやっていて、酪農の歴史も古い。いろんな地域の酪農家のおじいちゃんから本を引っ張り出してきて、歴史を大学生や中学生、高校生、小学生に話したり、出前授業をしたり、酪農の魅力を発信したり。実習生受け入れも本当に大変だけど、なるべく地域のためになるようなことをみんな話合っやってしています。

今後も町の産業をやりたいと思うようになるには、何が重要かなと思ったら、町が魅力的になることだと思うんです。町が魅力的になるというのはやっぱり活気づいていて、みんなが楽しい、自己実現している町であることだと思うので、自営業の人たちが中心となって、楽しいよ、こんなに楽しいんだよ、豊富町というようなことを頑張っやって、いろんな会も豊富町は積極的に動いて

頑張っていますので、これからもできることは少しずつですけど、頑張ります。

杉谷:酪農業のUターンのお話がありましたけど、新規就農は全く経験のない方がやることじゃないですか。酪農業でもUターンは可能性としてあり得るのですか。

田中:宗谷で一番、酪農家が多いのは豊富町で、どこもそうだと思いますが後継者不足で、本当は帰ってこれる子はいっぱいいるのに、儲からないとか、親が資格取っていけと出してしまふ。でも、儲かれば、もっと帰ってくる人が増えるのかもしれないし。汚い、臭い、嫌だみたいな感じなのかなとも思うんですけど。でも、町がお金をたくさん出してくれたら、戻ってくると思うんです。そういう取り組みをしていこうという話はしています。

新規就農の取り組みもすごくしていて、豊富町だけ、北海道で増加傾向にあって、そこも力を入れてるんですけど、それだけでは絶対、追い付かないので、そこに力を入れていきたいと思っています。

杉谷:確かに酪農業は申し訳ないですけど、儲からないというイメージがどうしてもありますし、大変だなというイメージがあって。ただ、オホーツクの方に旅行に行ったりすると、こだわって牛乳を作ったり。田中さんのところもちろん、そうですけれど、わりと明るいイメージもあったりするので、若者が見て、酪農業って、結構かっこいいじゃんとか、結構儲かるんじゃないって思われることも大事ですよ。

田中:知らない人も多いから、日本全国、酪農って何？っていう子もたくさんいるので、教育実習ももっとたくさん受け入れて、いろんな人に酪農家を知っていただきたいと思っています。

杉谷:儲かる環境が大事ですね。

田中:儲からないことは誰もやりたくないですから。

杉谷:働き口だけでなく、そういうことも大事ですね。

鈴川:礼文町で地域おこし協力隊を卒業して、現在は移住定住の相談員として、礼文町の袋澗（ふくろま）という施設で活動していますので、移住定住の視点からお話しさせていただければと思います。

私が考えている若者を呼び戻すための魅力ある地域づくりを実践していく上で必要なことは、地域を深く知ってもらい取り組みは必要なのではないかと思っています。私どもも移住定住の相談を受けまして、高校生も今、地域に関する魅力というので、豊かな自然や漁業、観光など、特に漁業や観光業、酪農もそうですが、地域に根差したお仕事というところが深く関わってくるのかな

と思います。

実際、移住したいですという方にお話を聞くと、やはりこういう地域の特色のある産業に関連した職業に魅力を感じて移住したいと言っていた方も多くいます。ただ、実際のお話ではやはり皆さん、あくまで観光で来られて、そういったところを知ったり、深く地域について知らない方も多いのかなという印象を受けました。もちろん、私も礼文町移住者の身なので、全てにおいて、深く知っていたり、知識が少ない部分もあるのですが。

例えば、地域の人たちの生活。例えば、酪農で、お父さん、お母さんがいくら稼いでいるとか、地域の方がこんな大変なことをやっているというのを具体的に知ってもらうことで、大変さもそうですが、それに夢を見ていただく方も増えてくるのではないかと思います。

特に礼文町ですと、利尻昆布もそうですし、昆布を誇りに思って仕事をしている漁師さんもいて、私自身、そういう漁師さんを見て、こんなに素晴らしい場所だと思って、移住をして活動しているのですけれども。

今回、U ターンの方も多いたとは思いますが、北海道以外の方で宗谷地域に移住したいという方に対して、宗谷地区の魅力をより深く知ってもらうことよって、だからこそ来たいと思ってもらうことが必要なのではないかと感じました。

杉谷: 僕も利尻礼文は毎月、番組で行かせていただいています。地域おこし協力隊員の方がそのまま移住したり、起業するケースが本当に多いんです。そういう意味ではIターンというところにも何かヒントがあるのかなと思います。利尻礼文にもスタバはないわけですが、それでも来たい、住みたいという方がたくさんいらっしゃるということです。

坂本: どういう立場かを説明するのもなかなか難しい職業なので、ざっくり説明すると、2020年、コロナが日本全国で流行り始めた瞬間に大学3年生になりまして、福島県の大学に通っていたのですが、当時特有のリモート授業で、大学にいる必要がないということで、東京都出身ですが昔から北海道が大好きだったので、幌延町に来て、知人の家に住みながら、大学の授業を受けている中で、起業することになって今に至るという流れになっています。

皆さん、いろんな職業をやられていると思いますが、私は第3次産業しかやったことがありません。第3次産業の中でも、公務員系列でも医療従事者でもないという、そういう職業って、この地域にないというのを感じていて、引っ越して、この仕事を始めようと思った瞬間から、仕事を作る仕事だと思ってやっています。

なので、地域の中にはない仕事を端からぐらゐの勢いで全部やってやろうという感覚でやっています。ただ、その代わりに、地域の中にはないということは今まで儲からないから誰もやってこなかったということは重々承知をしているので、その分、いろんな地域。幌延町内で活動するという感覚は一切なくて、名寄から稚内までいろんな地域で広域的に仕事をしています。

やっぱり、皆さんの口から出てくる中で、「仕事」というのは一つ、引っ掛かっていて、私もいかに宗谷から出ていった子たちが戻ってきてやりたい仕事があれば、やっぱり戻ってこない。これは

戻ってくる子もそうですし、こっちに引っ越してくる移住の人たちも間違いなくそれだと思っています。

なので、この地域にはないけれど、この地域が好きで住みたいけど、仕事がないから出ていく子たちを見るたびに、この子たちがやりたい仕事って何？って、聞きに行くんです。やりたいことがある子は行っておいでと押してあげるしかないと思うんですけど、それが地域の中でできたら、もっと幸せなんじゃないかという部分について考えながら、地域の中にはないけれど、地域の中で需要があって、地域の中で仕事ができないから、結局、札幌や本州に頼んでいるような仕事をいかに地域の中でやって、福間さんからもありましたけど、地域の中にかにお金を落とせるかという。そのお金の受け皿になって、またそれを地域の中で暮らしたりする中で、地域の中で回していくことができないかなと思いつつ、日々仕事をしています。

仕事とは外れるのですが、うちの会社は従業員が総勢 14 人ぐらいて、大半が大学生が現役でやっているのですが、学生は東京、埼玉、神奈川だったり、近くでも旭川、札幌で、長期休みや 3 連休などで飛行機でこっちに来て、仕事をして帰るということをしています。その交通費も全部、会社から出しているの、なかなかしんどいところではあるんですが。

その中で面白いと思うのは、彼らに北海道は楽しいよ、道北いいでしょうということを布教するためにいろんなところに連れて行って、宗谷丘陵などいろんなところを見せてあげると、徐々にハマって行って、住みたいな、楽しそうだなとなって、多い子は年に 10 回くらい来るので、年間の 2 カ月くらいとある宗谷にいるような子もいて、そういう子たちが大学を休学して、1 年間、住んでみたいと言い始めたり、長い人では 3 年、住んでいる人もいて。

そういうのを見ていると、移住って、こういうところからでもいいんだなと。なかなか、行政視線だと、そういうのは難しい話だというのは承知はするんですけど、そういう新しい移住の仕方の入り口があるのもいいかなと思っています。

豊富町だと、同じような課題があると思うんですけど、若者の数が足りない、少なすぎて、同年代の友達ができないんです。そういうところにいるので、最初は本当に友達ができなかったんですけど、自治体をまたいで、いろいろ仕事をしていると、あそこに若い子がいるというのをたくさん教えてもらって、今は本当に困らないくらい、たくさんいろんな友達に恵まれています。その来た社員だったり、逆に仕事先で会った、商工会に 1 人だけいた若い子。すごい暗い顔しながら働いている子にここに来れば、若い人たちいるから、遊びに来ないと、誘ったりして。なんだかんだ、友達もいろんな自治体において、でも、結局 1 カ所に集まって、みんなで遊んでいます。そうでないと、遊べないくらい人数が少ないので、その少ない人数でコミュニティーを作って、みんなで大きい塊になって、今までは集落単位でやっていたようなイベントも大きい単位で見ると、新しいイベントができるといった部分にも着目して行って、交通機関も発達して、車があれば、稚内から幌延までは 1 時間かからないくらいになった時代の変化に合わせて、そういう距離を克服して、その分、人数を補っていくこともできたらいいなと思って、日々仕事をしています。

杉谷:非常に興味深いといえますでしょうか、やはりコロナで環境が変わって、働き方が変わったというのは結構、聞く話ではあるのですが、今、幌延でそういう仕事をされて、交流人口じゃないです

けれど、いろんな市町村と関わり合いながらやるという意味では、今日の会議も非常に意味のあることかなと思いました。

杉山:私は浜頓別で、2017年にやめる牧場を牛や機械も一式譲ってもらって、夫と2人で新規就農した形になります。去年から乳牛を引退した経産牛の肉の販売もやらせてもらって、福間さんにもすごくお世話になっています。

私は酪農家なので、田中さんの話は共感できることが多くて、Uターンで酪農家になる人を増やすのは大事だと思います。私の地域は結構、新規就農は1軒入ると、ポンポンって、隣近所にも入って、ハードルが多分下がるんでしょうね。譲るほうの農家さんのハードルが下がって、「あいつら、うまくやってるから、俺も若い人に譲りたい」みたいな感じで、次の人を入れてくれるんですけど。

今、私の地域で残っているのは代々やってきている農家さんが1軒だけで、新規就農が3軒、4軒になってくる見通しで、そうなると、この地域の風習や習慣などが全然わからなくなってくるなと思って、Uターンも新規就農だけじゃなくて、力入れてやってほしいなというのが最近感じるどころです。

宗谷を魅力的な地域にしていくのに一番大事なのは、地域の人が楽しく暮らすことじゃないかと思ってまして、うちの牧場では就農した当初から学生さんをインターンで受け入れていて、インターンで来て、それまで酪農とか視野に入れていなかったけど、杉山家の暮らしがすごく楽しそうだから、また来たい、もう一回来たいと来ているうちにはまってしまって、こっちに就職すると言ってくれた子も何人かいますし、ずっとこの暮らしがしたいから、私も農家になるしかないと言って、新規就農するという子もいて、それは元をたどると、別に私は浜頓別いいよ、酪農いいよと言っているわけじゃなくて、ただ楽しい暮らしを見せているだけなので、楽しいに勝ること、それより魅力的に映ることって。収入はいくらあっても楽しくないといけないと思うので、なにせ楽しく暮らすこと。みんなが生き生き過ごせる地域にしていくことが一番大事だと思っています。

それから、私は浜頓別の地域づくりの会議にも出ているのですが、若い人は仕事がないと言うんですが、現場からすると、人が足りないんです。若い人がやりたい仕事がない。もしくは、その仕事のことをよく知らないから、その仕事が視野に入らないという感じなのかなと思ってます。

なので、酪農だと、酪農の歴史や社会的意義などを出前授業でやっているところは多いし、浜頓別でもやっていますが、楽しさにフォーカスした授業もこれから必要かなと思ってます。

それから、今どんな仕事したいか。わかんないけど、いつか帰ってきたいという人もいると思うので、そういう学生さん、高校生に進路相談の段階で、リモートでできる仕事もすごく増えていると思うし、うちの敷地内にある古い家に東京の会社に勤めたまま、フルリモートで働きながら、移住して来た人もいて、そういうのが可能な時代になってきたので。そういうフルリモートでできる仕事を将来に見据えて進路を考えるのもいいんじゃないかなと思ってます。そうすると、もしかしたら、東京に出て、そちらが気に入ってしまうかもしれないけど、いつか、帰ってきたいと思った時に仕事を辞めなくても、こっちでそのまま続けられるなら、キャリアも捨てなくていいですし、住みたいところに住めるし。それができる仕事とできない仕事はもちろんあると思うけど、リモートでできる

仕事を進路相談で教えてあげるのは大事かなと思います。

私は大阪出身なんですけど、大阪は嫌いだったんです。できれば高校から北海道に来たいと思ってたけど、さすがに無理で、大学でこっちに来たんです。今35歳なんですけど、やっと、地元も結構いいやんと思ひ始めてきて、20代とか、30代前半だったら、まだ地元の魅力に気付かないかもしれないけど、年を重ねてくると、地元も良かったなという気持ちが芽生えてくるのかなというのは、いろんな人の話を聞いていても思うので。Uターンしている方の話を聞いても、大体そのぐらいの年で帰ってきているので。それにはやっぱり小さい頃に地域の魅力にたくさん触れておくのが大事かなと思っています。

杉谷: 杉山さんから地域が抱える課題としては、酪農業をどうやって維持していくかということと、それから、働き方がどんどん新しくなってきて、フルリモートで、地元貢献できるような。先ほどの尾崎さんの話にもありましたが、キャリアを生かす方法も一つあるのかなと思いました。

あとやはり、楽しく暮らすというのは本当に大事だとおっしゃっていましたが、楽しく暮らすことを一つの価値観として、どういうふうに次世代の子供たちに伝えていくかというのは結構難しいと思いました。

先ほどの福間さんのお話や開建さんが取ったアンケートの話で、やっぱり娯楽を求めてしまう部分があって、ラウンドワンがあったら幸せなのかと思うんですけど、決してそうではなくて。北海道にラウンドワンは札幌と旭川と函館にしかないわけですから、他の人はみんな不便かという、そうではないわけで。

なので、楽しく暮らすことをどういう価値観で植え付けていったらいいのかなというのは非常にこれから必要なことだろうと思いました。

僕のFM放送局で、開局からずっと「住めば都わっかない」という番組があって、開建さんにも振興局さんにも転勤族の方に出ているのですが、そういう方たちの話を聞くと、都市部から稚内に来て、ようやく満員電車から解放されたとか、ようやく暑さから解放されたとか、あるいは仕事の時間が都会に比べて短くて、その分、自由時間ができて、新しい趣味を始めたとか。そういうふうに言う方が結構いるんです。町の印象は思ったより都会で、コンビニもあるし、チェーン店もマックもあって、それなりだな。日常の買い物には全然不便がないねと。

冬は確かに大変だけれど、本州の大雨災害に比べたらましだとか、風は強いけど、台風が来るよりましたなとか、結構、都会と比べていい面もたくさんあるんです。ただ、一度出てみないと、稚内にいると、隣の芝生じゃないですが、そういうふうに映ってしまうだろうなと思います。

なので、子供たちに何か教育をする時に稚内のいいところだけを叫ぶのも大事なこともかもしれませんけれども、そうではない部分も伝えていけたらと思います。それは、移住者の話を聞く授業をつくるとか、そういうのも必要なのかなと思います。

ここで、Round1は終了しましたので、オブザーバーで参加していただいている方からコメントをいただきたいと思っています。稚内市教育委員会の斉藤譲一さん、お願いします。

■オブザーバー 稚内市教育委員会 主査(学芸員) 齊藤 穰一 氏

教育委員会で学芸員の仕事をしています。皆さんの話を聞いて、地元の人が楽しく暮らすことというキーワードが私の心に非常に響きまして、先ほど、富田さんがお話ししていた旧瀬戸邸や赤れんが通信所という施設は教育委員会で管轄しているのですが、その中でやはり、地元の民間の富田さんを会長にした歴史・まち研究会の存在は非常に大きかったと言えます。

富田さんのお話にあった通り、1週間ぐらい前にガリレオガリレイさんがどうしても。いろいろなポイントがあって、どれもどうしてもだったと思うんですが、赤れんが通信所で撮影したいというお話が1カ月前にありまして、ただ、積雪期なので、車が入っていけない。除雪するのも無理と言ったら、歩いてでもいいから行きたいと。

最初のプロモーションビデオで、赤れんが通信所。その時、私も6~7年前に参加させていただいたのですが、メンバーが椅子に座って、歌っているような感じで撮影するシーンがあって、それがファンの方々にもメンバーの方にも非常に大事なシーンということで、どうしても、次のアルバムの中でPVとして使いたいというご希望でした。

それで、椅子をどうしようかということで、市内のとある場所から借りられることがあったので、私も協力させていただいたのですが、山までハイエースで運んだんです。ただ、私の先代の学芸員さんが寄贈というか、長く赤れんが通信所に3人掛けのピンク色のソファがあったので、あるのは知っていたんだけど、今のメンバーには小さ過ぎない？ ということで、一応それも候補には入っていて、メンバーに小さいけど、どう？ と聞いたら、全然これでいいということで、それでやろうということになりました。

それを前回のプロモーションビデオと全く同じ場所に置いて、メンバーも同じような場所に座って、1時間ぐらいかけて撮影しました。先ほど言った通り、歩いていかなくちやいけないので、例年3月のお彼岸ぐらいに、歴史・まち研究会の富田さん中心に堅雪散策会をやっていて、その時は雪が堅く締まっているんです。ただ、まだ新雪の時期で軟らかいので、長靴でも埋まってしまって、なかなかこの時期、行くことはないのですが、こういう理由から行かなくちやいけないので、我々のほうでスノーシューをご用意したんです。

それで、メンバーにスノーシュー履いてみる？ と聞いたら、スタッフもメンバーも北海道出身なのにスノーシューを履いたことがないというので、委員会のスタッフが20代の彼らに付けてあげたのですが、その体験がすごく興奮しているというか、喜んでいただいて、ちょうど2時ぐらいからスタンバイして、3時か4時から撮影したんですが、奇跡的に先週、天気が良くて、ちょうど3時ぐらいは稚内も夕日が暮れる時間で、いわゆるマジックアワーと言われる時間に撮影できて、メンバーがすごく喜んでいたので印象的でした。

楽しむってことでいうと、たまたま稚内市と交流している石垣市の職員が来て、その方も教育委員会の中で博物館などに関わるお仕事をしているので、赤れんが通信所をどうしても見たいというリクエストが去年の2月にあって、その時もスノーシューを履いて連れていったのですが、いろいろな体験をご用意した中で、私が見た中ではスノーシューを履いて歩いたことを非常に喜んでいました。

我々は雪道、毎日雪かきして、雪は邪魔というイメージしかないような人だと、雪で歩いて楽しいの？と思うんですが、実際に私もスノーシューで歩いたら楽しいものだと思うし、初めて雪国。例えば、先ほどの石垣の雪も見たことがない地域から来た人が体験する冬のイベントとしては、誰でもできるスノーシューやカーリングなど、そういう体験は地元の人は気付いていないけれど、よそから来た方々には非常に魅力的な潜在的な素晴らしいフィールドがこの地域にはあるのではないかと最近、特に思っています。

また、その時に石垣の女性は、歴史的な価値として赤れんがの通信所を見たいという要望プラス、雪に触れる体験をして喜んでいてのを感じて、アドベンチャーツーリズムという言葉は知っていましたし、大事なんだろうと思っていたのですが、最近、私が考えたアドベンチャーツーリズムはきっと、そういうことなのかなと思いました。

話を戻しますと、皆様からお話しいただいた通り、地元の方がそういうのを楽しんで、雪かきも大変だけど、雪にはこういう魅力もあるということで楽しんでいくことが大事ですし、恐らく、今の若い子たち、ガリレオガリレイも含めて、よそから来る方、インターンシップの方々、我々も受け入れることはあります。研究などで受け入れることもあります。魅力を感じて、UターンやIターンしていただく方も多いいんじゃないかなと感じました。

繰り返しになりますが、やはり楽しむことが大事なんだというのが今日、お集まりの皆様の話を聞いて、改めて感じたことです。

<休憩 14時25分再開>

Round02 「管内の高校生に聞いてみたいことは？」

杉谷: それでは、意見交換の Round2 を始めさせていただきたいと思います。

先ほど、吉田課長からご説明があった通り、来年度以降のシンポジウムの開催に当たっては、その題材として高校生へのアンケート調査を継続していくということでした。

つきましては今後、管内の高校生に聞いてみたいことについて、2 つほど、その理由も含めてお話しいただければと思います。

尾崎: 聞いてみたいというか、確認したい部分ですが、稚内に帰ってきたいという子が稚内に来て、何をしたいのか、聞いてみたいなど。もちろん、仕事はあるんですけど、その後、何がしたいか。何か具体的にあるのか、ないのかを聞いてみたい。

あとは、未来の稚内をどう見ているのか。ちょっと難しい質問かもしれませんが、自分たちが帰ってきた稚内がどうなっていくのかという未来を想像してもらいたいと思います。

僕が思っている、仕事だけで帰ってくるのではないという、何かやりたいことを持って帰ってこれないのではないかと思っているの、その確認を質問の中でできたらいいと思います。

富田:1つ目は、自分が住んでいる地域は、いつから、なぜ人が住み始めたと思いますかと聞いてみたいですが、でも、調べなければわからないということで、できれば、高校生にも地域の歴史をひもといてもらって、こういうことで、ここに人が住み始めたということを勉強してもらえたらという質問が1つ。

2つ目は、自分が住んでいる地域にこれが推しだと思えるものはなんですかと。高校生が考える推しは果たして何だろうというのを2つ目の質問にさせていただきました。

杉谷:これも、地域を知るという意味でいくと、どうしてそこに人が住み始めたのかというのは興味深いですし、調べ始めると、意外にいろんな発見があって、面白いかもしれないですね。

あと、高校生は推し活とか、推しという言葉を使っていますので、これも面白いと思いました。

福岡:私も2つで、1つは今の自分が何点かということを知りたいと思いました。さっきの坂本君や杉山さんもそうですが、移住者のほうが楽しく暮らしていると思うんです。私も友達はほとんど移住者なんですけど、みんなに共通していることは何かと考えたら、自分軸で生きているというか。行政に仕事を見つけてほしいとか、スタバを持ってきてほしいとか、全部他人軸というか、自分でやれよって話なので、自分がやりたいことは案外見つからないし、今はみんな、結構それに悩んでいると思うんです。

私自身も今、40歳超えて、家族ができて、ようやくいろんな事業も腹が座ってきて、自分軸で事業をしていけるようになってきたところなので、高校生で自分の時はとてもじゃないけど、そんなものはなかったし、自分に自信がなかったんです。

やっぱり、今の教育も私の頃とは違っていると思うので、今の教育を受けて、そういう自己肯定感や自己受容をどういう感じでしているのかを純粋に知りたいところが1つです。

あとは、食という意味でいうと、こないだ札幌のホテルに泊ったら、若い子はみんな、コンビニで朝ご飯買って、ジュースと菓子パンとつまみみたいな。お菓子のようなものを食べてたんです。これで食べて仕事に行くような子もいたし。

それが良くないということではなく現実なので、だしを取ったことがあるとか、みそ汁を飲んだことがあるとか。基本的に食にまつわることを聞いて、問題意識というか。そういえば、しばらくみそ汁、飲んでないぐらいのことは思っていたと思いました。

田中:町の産業、いろいろあると思うんですけど、やりたい、継ぎたいと思えることは具体的にどういふことがあれば、思えるのか。もちろん、収入の安定や安全面、家族との時間、楽しさなど、いろいろあると思うんですけど、やりがい欲しいという人がもしいたら、どういうやりがいがあるのか。それぞれだと思うんですけど、人それぞれのやりがいがあるし、それをもっと知ることによって、行政ももう少し、いろんなアプローチができるのかなと思いました。

もう1つは、町にこういうことがあったらいいな、イベントがあったらいいな、お店があったらいいなとかあると思うんですけど、若者は自分の理想があると思うんですけど、やりたいことや理想の

人生のために逆算して、どういう努力をしているのかを聞いてみたいなど。自分は高校生の時、何も考えてなかったけど、今の子は大変な時代を生きているから、いろいろ考えていると思うんです。私はすごい、ゆとりで育っているので、学生時代、何も考えてなかったけど、今の若い子の考え。こういう人生のためにこういう努力をしています。こうなりたくないから、こうしてますということがあったら聞いてみたいです。

杉谷: こういう人生のために今、何を考えているかですね。

田中: 自由に働きたいから、資格を頑張って取るとか、自分の好きなことを極めるとか、多様化してんじゃないですか。今の若い子が何をしているか、インスタぐらいしか情報がないから、リアルに聞いてみたいと思います。

鈴川: 以前、質問しているものと似たようなところもあるんですけど、どこに住みたいのかと、その理由を聞いてみたいと思ってました。住みたい理由なんかでも、例えば進学、就職を考えてますかというので、進学の理由でここに住みたいですだったら、宗谷管内にそれがなければ、それが理由だとは思いますが、他にいろんな理由もあるのかなと思って。

その理由の中で、例えば、ほんとに宗谷にないことが理由なのかなというところを見たり、逆に住みたい地域のことを知ることで、その地域のやり方を生かせるところが見つかるのではないかと思います。

私も福島県から移住して、離島が好きで礼文島で過ごしているのですが、杉山さんのお話にもあったと思うんですけど、私も地元は当初、好きじゃないといいますが、嫌いではなかったんですけど、地元に残ろうという思いがない中で過ごしてまして、楽しいことをして過ごしたいという中で特徴がある離島に移住して、今はほんとに楽しく過ごしていますけれども。今やっと、礼文で過ごす中で、礼文の良さ、宗谷の良さを知って、やっと地元もいいなと思い始めるようになりまして、逆に他の地域を知ってもらうことによって、宗谷の魅力も感じていただけるのではないかと思いますので、どこに住みたいかを聞いてもらって、そこについて知ってもらうことで、逆に宗谷の良さがわかることもあるのではないかと思います。

杉谷: どこに住みたいか、なぜというのはアンケートにありましたか？ どちらかという、自分の住んでるところに対するアンケートですもんね？ でも、鈴川さんの言う逆説的なのは面白いかもしれません。なぜ、そこに行きたいか。進学はわかりますが、その後、どうするのということは意外にそこまで考えてないかもしれませんけど。結構面白いかもしれません。

北海道に移住される方は、この地が好きとか、北海道に憧れてとか、島の方が良くてという人がほとんどですよ。そう考えると、ハード的な施設だけの問題じゃないとは思うので。ただ、若いうちにそれに気付くのは、先ほど福間さんがおっしゃってましたけど、実はとても難しいのではないかと思いますけど。

坂本:私も移住組なので、地元のことなんですけど、悪い印象は特段ないんですけど、地元が好きですかと言われたら、別にというのは正直、まだ若造のせいなのか、地元の魅力には全く気付いていない 24 歳です。福岡さんのおっしゃる通り、超エンジョイしていて、一度、聞かれたことがあるのはなんで、そんな不便なところに住んでるの、何がしたいのというのとあるメディアの方から、取材の事前連絡で聞かれたことがあって、唯一その取材だけは気に食わなくてお断りしたんですけど。頑張って、我慢して住んでいるという前提が全く理解できなくて、こっちは好きでこっちに来て、楽しく暮らしているのに、なんでつらい前提で取材をされなければならないんだらうというので、カチンときたんですけど。

こっちは大好きで暮らしていて、逆に都会から来る側からすると、こっちに面白さとか、魅力を持って、都会で生まれ育ち、僕も 18 年間、東京で育って、中学・高校はずっと電車通っていたので、満員電車で毎日乗ってたんですけど。満員電車の中では始発駅だったので、座って通っていたのに満員電車は大嫌いなんです。数日前も新千歳空港に行って、ちょっと人が多いだけで嫌で嫌でしょうがなく、ずっと気持ち悪くなっていたんですけど。

逆に皆さん、おっしゃっていた都会に憧れている高校生がいるのはいいと思うんです。多分、行ったことがない、住んだことがないと思うので。その都会の何に憧れているのか、何を求めているのかというのはすごく聞きたいです。都会で暮らして、都会生まれで、他に行って、都会に戻ってくる人はあんまりいないと思うんですけど。でも、地方から都会に出て、地方に戻ってくる人は結構、一定数、高確率の割合でいると思うんです。

ということは、両方経験した時、どちらに戻るかというのは、多くの人の中でも 1 位に定まっているのではないかと。であれば、逆に地域のことを好きになってもらうのであれば、いったん出てもらったほうがいいのではないかとという考え方も。いろんな経験をした上で戻ってきてもらうほうがいいんじゃないかという考え方もできると思うので。今の高校生たちが出て行った時にどんなことがしたいのか。将来、どんな職業に就きたいのかもそうですけど、そういう部分をぜひ聞いてみたいし。

逆に彼らが思い描くようなライフスタイルに合うような、この地域の仕事だったり、生活環境。趣味もそうですけど。それが自分たちで作り出せるような基礎フィールドがあるような地域になっていくといいんじゃないのかなと思ってます。

杉山:私も 2 つあって、1 つは将来どんな仕事に就きたいか。それは宗谷でもできそうかというのを聞いてみたいです。仕事がないというけど、やりたい仕事って、なんなんだろうというのをすごく聞いてみたいです。

多分、私らが就職活動している時とは結構、職種なども変わっていると思うので、若い子は一体、何をしたいのかなど。それが仕事の職種なのか、働き方なのかということも含めて、どういうふうに住んでいきたいのかというのがすごく気になってます。

2 つ目は、自分だけが気付いているマニアックな宗谷の魅力について聞いてみたいです。私はま

だ、宗谷に来て 10 年ぐらいで、移住者だし。移住者だから見えることもあるけど、ちっちゃい頃から地元に住んでるからこそ見えることもあるので、ご飯がおいしいとか、一般的なやつじゃなくて、すごく小さい、マニアックな。ここのお店が最高だとか、そういうのもいいので、聞いてみたいと思います。

杉谷: 今、たまたま高校生ということで、高校生に対するアンケートをやっているんですが、先ほどの尾崎さんの息子さんが帰ってくるという時にそういう U ターン組をどうしたら戻せるのかというがありまして、先ほど、坂本さんが言われたように、どんどん一度、出てもらったほうがいいんじゃないかと、僕もそういう人間でしたし、そのほうがより地域のことがわかるのではないかと思ったりするので、どんどん出てもらっていいのかなと思うんですけど。

ただ、そういう人たちをどうやって戻したらいいんだろうと。今、9 期の中では 10 年計画ですから、高校生は 28 歳ぐらいですよ。28 歳ぐらいでも多分まだ、先ほど福間さんや田中さんが言っていましたけど、20 代後半ぐらいって、結構子供で、意外にわからなくて、30 代超えてぐらいから、ようやく自分のやりたいこととか、40 歳ぐらいになって、自分のキャリアも含めて、好きには言いませんけど、やりたいことができてることもあったりするので。僕はどちらかという、30 代、40 代の人たちがどうやったら、稚内にまた戻ってきてくれるんだろう、興味を向けてくれるんだろうということがあったりするので、そんなことも今後、考えてくれたらと思います。

それは先ほど、杉山さんが言っていましたけど、楽しく暮らしてるように見えるというのもすごい大事なことだと思いますので、それで町が活気づいてるように見えれば、いつでも帰ってきていいな、みたいなこともあるかなと思いました。

高校生の話じゃないですけど、意外に稚内って、経済界がすごく強いじゃないですか。経済界が強くて、思ってる人は多分、若者がちょっと台頭していくと人も結構いるのかなと。福間さんは若くして活躍されてる方なので、そんなことは思わないかもしれないですけど、意外に稚内って、昔ながらの風習や保守的な考えとか。田舎はみんな、そうなのかもわかんないですけど、そういう傾向があって、ちょっと古臭く感じてしまう部分も絶対にあるのかなと思うんです。

今、どんどん人口が減っていく中で、どうやって人を戻したらいいんだろうと考えた時にちょっと話はそれるんですが、宮城の女川町。女川町は復興のプランナーと言われているんですが、震災で 7 割ぐらいの住宅がなくなって、人口の 1 割が亡くなってしまった。そういう町が次に町を興そうといった時に要はご年配の方々、先輩方がもう還暦以上は口出すなど。これは女川町のスローガンのようになっているんですけど。

それで、若者だけのまちづくりをしていったんです。それは商店街から町の動線から全部やっていくんだと。還暦以上は口出すなどというのはほんとに勇気のいることだと思ったんですが、実際に町を興していった若者たちの話を聞くと、決してそうではなくて、やっぱりご年配の方、大先輩の方々が常にバックアップして、力を貸していただきながら、自分たちのやりたいことを全部やらせてくれたという環境だったようです。

今、女川町は年間何十万人も観光客が来るぐらいの商店街とまちづくりになっていて、非常に

賑わっているんです。元々、観光客なんて来るような町じゃなかったんですけど、当然、魚もかまぼこもおいしいし、おいしいものがたくさんあって、それを売れる環境やプロモーションできる環境が整ったことによって、観光客がどんどん来て、移住者も増えていって。今、女川町は人口が少しずつ増えているらしいですけれども。そういう環境というのもあるのかなと思いました。

僕はもう50代半ばぐらいになってくるんですけど、そういう30代、40代ぐらいの方たちが高校生も含めて、どういうまちづくりをしていきたいのかというのは先ほどの尾崎さんの話じゃないですけれども、すごく興味があります。ちょっと任せてみたいなという気持ちもあったりします。住み残って、住み戻って、そういう町になってくれたらと思いました。

それでは、オブザーバーの方にお話を聞きたいと思います。地元だけでなく学生と関わっている宗谷管内唯一の育英館大学の佐賀副学長から一言お願いします。

■オブザーバー 育英館大学 情報メディア学部 情報メディア学科 副学長・キャリア支援室長 教授 佐賀 孝博氏

うちの大学は学生数は少ないのですが、地元で働きたいからうちの大学に来る学生もいますし、元々はIT系に行きたい、教員になりたいというので外から来る学生もいるのですが、そういった中で4年間、稚内で、あるいは宗谷管内のいろんなところでお世話になって、稚内で、あるいは宗谷管内で働いてもいいかな、みたいな形で働いている学生がたくさんいます。全体数が少ないのであれですが、多分割合からすると、他の大学に負けないぐらい、かなり多くの学生がこの辺で働かせていただいている状況になっています。まさにそれは、接している人たちが楽しそうとか。彼らから言わせると、人があったかいということ言うんですが、そういったところが刺さって、働いているところがあります。

皆さんの話を聞かせていただいていると、楽しいとか、誇りを持って働いているところなのかなと思うので、私が聞いてみたいというのは、周りの大人の人は楽しいと言ってますかとか、誇りを持って働いていますかとか、自分の仕事をおまえもやれと言うかとか。そういったところ。実は大人が元気じゃないと、子供もそんなに、やってみようかなと思わないんじゃないかなと思ったりします。

先ほど、尾崎さんの話にあった息子さんが帰ってらっしゃるというのも多分、お父さんが楽しそうだからやってみようかなと思ったんだと思いますし、私事で恐縮ですが、うちの長男は高校の教員で、今年3年目なんですが、宗谷の教員になりたいとずっと言っていて、それは多分、周りの先生や大人が楽しそうとか、お世話になったということなんです。残念ながら、希望調査で1位稚内、2位宗谷、3位札幌って書いたら、絶対札幌はないだろうから、どこかに引っ掛かるんじゃないかと思ったら、留萌管内の高校に行っちゃって、ちょっとかすった感じなんですけど、ゆくゆくは帰ってきたいと言っています。

そういったことも含めて、ぜひ、周りの大人はどう思っているというふうには本人たちは思っているのかというところ。実はこの辺が、大人が元気だったら、みんな楽しく、一緒にやっついこうと思ってくれるのかなと思って聞いていました。

杉谷:ちなみに、聞いてみたい大人の対象年齢は例えば、どれぐらいがいいと思います？

佐賀:私としてはお父さんとか、お母さん、あるいは周りにいる先生もいいかもしれないですが、そういったところですよ。お父さんが、あるいはお母さんがうちの会社で働けると言えるような会社だと、自信を持って言えなければ、それはやっぱり。当然、苦勞があるので、なかなか自分の職種に子供をさせるというふうにはならないかもしれないですけど、そういったことを普段から言えているかどうかかなと思っています。

Round03 「地域のために、今後取り組んでみたいこと」

杉谷:それでは、最後のRoundになります。なかなか、具体的などころまでお話しするのは難しいかもしれませんが、今後、地域のために取り組んでみたいこと。これについて、お話をいただければと思います。

尾崎:僕が考えているのは、仕事をつくってあげないと、帰ってこれないですよ。仕事もないところに趣味だけで帰ってくる子は恐らくいないと思いますので、自分がやりたいことを手助けできる仕事づくり、仕事場づくり。そういったことをやっていかなくちやいけないのかなというふうに考えています。

それが実際に仕事になって、お金になるかという、そうではないような気もするんですが、僕もさっきから言ってますけど、75%も帰ってくる可能性のある子がいるというのは絶対的に大事なことだと思っていて、これが逆の25%だったら大変です。25%の子を何とか、こっちに連れていかなくちやいけないということを考えなくちゃならないですけど、75%もいるということはそれだけ帰ってくる可能性が高いということを念頭に置いて、こちら側のスタンスも考えなくちやいけないと思うので、僕はそこを今後、徹底的に、この中身を基にいろんなところでそういう話はしていきたいと考えています。

富田:歴史・まち研究会では、地道ではあるんですが、やっぱり子供たちに自分の住んでいる地域の歴史を知ってもらうためにいろんな活動をしていきたい。これは稚内市の教育委員会とも連携して、わっかない学の講座などもやっているのですが、講座というのはほんとに高齢の方しか参加していただけないものですから、そこは何とか、若い、できれば中学生などに地域の歴史を知ってもらう活動を続けていければと思っています。

それと、研究会とは関係ないのですが、私は稚内カーリング協会の会長もしてまして、2020年に素晴らしいカーリング場が稚内にできまして、少年団も結成されて、今は20名以上の子供たちが一生懸命練習しています。私もコーチ1の資格を取って、指導にも行っているのですが、ここは将来的にできればカーリングで、稚内からオリンピックを輩出したいという大きな目標を掲げ

て頑張っています。そちらのスポーツのほうでも頑張っていければと思っています。

杉谷:そういう環境づくりも絶対に残るための一つの手段というか、選択肢ですよ。僕は常呂町のアドヴィックスにおとしぐらいに行ったんです。常呂町って、ほんとに何もありません。稚内に比べたら何もありません。突然、大きいカーリング場がぼんとあるんですけど、この町にそぐわない大きなカーリング場だと思って入ってみると、ものすごく活気があって、いろんな少年団の写真や道具もずらっと並んでいて、これで町がつくられていて、そこで残っている人たちもたくさんいるなというふうと思うと、今はたまたまカーリングの話でしたけど、先ほどのバスケの話もありますし、僕がやっている吹奏楽の話もありますし、いろんなところでそういう環境づくり。もちろん、趣味のことも環境としてつくっているのはとても大事だと思います。

福間:うちは事業をやっているんで、働きたいと思ってもらえるような会社にしていくのが一番の目標です。

あとは、売っているものをただ全国からお取り寄せして売ってことではなくて、地域経済を回さなくてはならないので、地域の生産者さんが増えるようにとか、安心して販路として使ってもらえるようなインフラを目指したいと思います。

もう1つは、スーパーというのはやっぱり、町のコミュニティーの側面もあると思いますので、今後、コミュニティーという活動がすごく気になっていて、少し勉強しているのですが。やっぱり、地域でみんなが関係し合うというか、おせっかいし合うみたいな関係。私も小中学校の時は地域のおじいちゃんたちに百人一首を教えてもらったり、まだそういうコミュニティーが残っていた時代だったので、いまだにそういうおじいちゃんたちと交流あるのですが、今は多分そういうのはないし、おじいちゃんたちも何考えてるかかわかんないから、何を話していいのやら、みたいな感じだと思うんですけど。何か役に立てる関係というのが、このおじいちゃんの手裏剣作れますとか、それだけでも2時間ぐらい預けていいですかと言えるような方。そういう関係とか。そういう中から、今やりたいことって、なかなかこの縮小社会で見つけられない子が多い中で、そういうフックになるような出会いとか、このおじいちゃんのために何かやれないかなとか、このおばあちゃん、具合悪そうだなとか、スーパーをコミュニティー形成としても意味があると思っているので、そういうことを意識してやっていきたいと思っています。

杉谷:コミュニティーって言葉があるんですか。勉強不足でした。

福間さんのところはいろいろと、バランスボール体験などいろんなことをやっていますよね。そういうのが中心になって、コミュニティーをつくっていくのは大事なことですよ。

田中:私は同じことを繰り返さないように気をつけているんですが、宗谷に移住してくれた皆さん。すごく人生を楽しんでいて、いいなと思って。やっぱり、移住した人の共通点は自己実現だと思うんです。みんな、そうだと思うけど、みんな、自分がいる場所で自分の好きなことができるというの

が一番、その人の幸せだと思うので、それがどうやったらできるか。Uターンした人がどうやったらできるかということをまず、バックアップするコミュニティーづくりが必要だと思うんです。

今、新規就農者をバックアップするコミュニティーづくりはしているんですが、やっぱり若者を外に出すのはすごく難しく、あんまり言うと、パワハラというか、上からの圧になるから言えないし。かといって、若者たちが中心となって何かをやったら、まだ上から叩かれる節もあるかもしれないし、なかなか、自己実現をしたり、バックアップするコミュニティーづくりが今、私の中ではあまりできていないと思ってんですけど。今、SNS とかがあるので、もうちょっと、いろいろ発信して、若い子たちにまず地域のことを知ってもらって、若者を引っ張り出すというのを今、頑張ってるんです。多分おせっかいだと思われると思うんですけど、そういうことを少しずつやっていきたいのと。

やっぱり田舎は都会にないところがいっぱいあることをもうちょっとアピールしたいなど。自営業者がすごく豊富町は多くて、仕事をしている人は女性でもいるんですけど。待機児童もゼロだし、土地も安い。農家なのでゼロ。例えば、都会に行ったら 5,000 万円する土地がゼロなので、家も建てやすい。みんな、車も2台以上持っているし、すごく贅沢だと思うんです。こういう贅沢が稚内だって余裕でできるし、公務員になったら、めちゃいい生活できるし。自営業だったら、持ち家があれば、大体好きに暮らせるというのをもっとアピールして、都会に行って帰ってくる人でもいいし、若者にもうちょっと教えてあげられたらと思ってます。あと、アウトドアもいっぱいできるし、スキー場も安いし、夏はサイクリングし放題。もうちょっと、田舎の魅力を発信していきたいと思ってます。

杉谷: 田中さんのような方が豊富だけじゃなくて、稚内の学校で出前授業してもらおうと、面白いんじゃないかと。

鈴川: 私は移住定住の関係で、地域のために今後、取り組んでみたいことなんですけど。今も取り組んでることで、より取り組んでいきたいのは私自身、地域の移住に関してはどうしても仕事が必要関わってくるのが正直なところで、私自身、こういった活動もさせていただいているんですが、礼文町は漁業の町なので、漁師さんのお手伝いをしたり、飲食店の話を聞いたり、お手伝いしたりもしてまして、そういう実態の仕事をまず、自分で体験して知っていくところで、その上で、移住したい人にそういったことを伝えられたらいいなと思ってます。

どうしてもできないことはあると思うんですけど、企業の方、酪農の方もそうかなと思いますが、人手不足。ほとんどの事業者さん。漁業者さんだけでなく、通常の採用でも人手不足の話があるところなので、実際に今、そこで働いてくれる人が増えるような、実態としてほんとに求めているところを発信できるように、そういった企業さんともいろいろ話をさせていただきながら、実態を把握していきたいと思っています。

坂本: 地域のために今後ということで、まずは自分の職を安定させるところから始めたいと思います。

今、会社をつくって4年目ぐらいですけど、やっと秋から1人、ほぼフルタイムの社員が誕生して、生まれ育ちが中川町で、旭川方面に引っ越した直後に仕事があるからといって、連れ戻した人なんですけど、楽しく仕事をしてきているので、うれしい日々なんですけど。

地域のために今後、取り組んでみたいことはざっくり2つかなと思っていて、まず、若者同士のゆるくつながる場所をつくりたいと思って。若者といっても20代とかじゃなくて、40代以下ぐらいの人たちで、別に強いつながりがあるとかじゃなくて、ちょっと困った時にそういえばあの人、どう、みたいな感じでゆるく話せて、かつそれも物理的な距離が近い人だけじゃなくて、道北の中で広域的に、何かあった時にあそこの何々さんならと、ぱっとつながれるようなゆるい関係性を築けるような。

それも、こういう会に参加しなきゃのような強制感もなく、何となく人が集まって、何となく顔を合わせて、しゃべったこともないけど、あの人、知り合いだなと思ってる空間をどこかにつくってあげたらいいなと思ってます。

その中で、なぜ若者メインかと。別にそこに上の年代の方々にもぜひ、来てほしいんですけど、やっぱり若者がある程度、いることによって、未来に対する希望感みたいなものが地域の中で必要だし、最後、思い切るのにそこがないと、入るのもリスクみたいになってしまうので、そこをうまく創出できるような形ができればと思っています。

もう1つ、やっていきたいことは、今も少しやってはいるんですが、故郷の話の中で皆さんから出たような、地域のゆるいところ。観光の雑誌に載ってないタイプのゆるいところをゆるく伝えていくというのをやりたいと思っています。

今も、春に走ってる観光列車の時に車内放送をさせていただいて、それは観光案内をするというより、この地域で暮らすと、こういう生活をしています、こういうところが楽しいですというような住民目線というか、住んでいると、こうなりますというような、地域の本質的な楽しさを接する機会がない人に発信しています。それをもうちょっと、別な場所も含めて、よりやっていきたいと考えています。

あとは地域の高校生にいろんな職業があるということはぜひ、伝えていきたいと思っています。私も多分、職業の進路先として書きようがないような職業をしているので、職業の選択肢としてどうしても、子供の頃から身近な職業となると、選択肢が限られてしまうので。その中だけじゃないということを、先に自分のやりたいことをやるということが出てくると思うので、自分のやりたいことをイメージした先にこの道北、宗谷の地域でやるのもいいかもと思ってもらえると思うので。自分のやりたいことを見つけてもらえるようなきっかけを伝えていけるようなことができればと思います。

杉谷:坂本さんのようなお仕事は僕ぐらいの世代でもほんとによくわからないところがあるので、どういう仕事をしているのかを紹介するのは、建設業とか、水産業ということじゃないので、そういうのも稚内でも、宗谷でもできるということを紹介していただきたいと思いました。

杉山:私は、自分の事業としては、使いやすい特産品というか。浜頓別って、これといった特産品

がなく、一応ホタテが有名なんですけど、ホタテは猿払に負けてるし、カニも枝幸に負けてるし、サケも雄武に負けてるんです。私はまだまだ有名人じゃないので、そんなに力になれるかわからないですけど、ネットで検索してみると、肉とホタテを合わせたお土産は存在しないので、そこら辺でちょっと珍しいお土産品。今、私の商品は冷凍品がほとんどなので、常温で持ち運べて、役場の人も結構、東京などに行って、売り込みしているんですけど、そういう時に常温じゃないと大変だというので、常温の何かを作りたいのと。

それから、宗谷のほかの生産者さんと積極的にコラボをしていきたいと思ってまして、宗谷って、人は少ないんですけど、肝が据わってるというか、こんな厳しい自然環境の中で、わざわざ宗谷に住んでるという、すごく芯の太い人たちがいて、すごく面白い人たちがたくさんいる地域だと思うんです。そういう人たちの生き方も含めて、一緒にコラボして商品を作って、そういう背景も一緒に伝えていけたらと思っています。

地域的なことで言ったら、昨日、町のカフェに行ったら、U ターンで戻ってきた人が2人いたので、ちょうどいいと思って、何で帰ってきたんですかって聞いてみたんです。そうしたら、友達がいたのが大きいと言って、ちょうど同世代、同学年の友達が同じようなタイミングで帰ってきて、そして、おれもってなるよって言っていて、そうだよなって。帰ってきて、知り合いもほとんどいないんだったら、帰ってきづらいけど、あいつがいるから帰るか、みたいなきっかけには友達の存在はすごく大きいと思いました。

町の会議で言われていたのが、子供が遊ぶところがないよねって。確かに公園はあるんですけど、公園は小さい子向けだし、小学生だったら暴れられるところ。中高生だったら、友達とだべれるところ、たまれるところがないと思って、アンケートを見ていて、スタバとか、マクドが欲しいっていう声はあるけど、それって、マクドやスタバが食べたいんじゃないって、たまれる場所が欲しいのかなって思って。

なので、スタバやマクドを誘致するのは現実的じゃないし、それこそ福間さんが言われたように食の貧困化みたいになってしまうし、宗谷はそれとは別の路線で魅力を発信していきたいので、そういうのは違うと思うんですけど。そういう中高生がたまれる場所。今だったら、やっぱり Wi-Fi があるといいし、遊び方も変わってきてるので、Wi-Fi があって、座って、長時間いても怒られなくて、大きい声を出しても大丈夫でという場所を町のほうでどうにか用意してもらえないかなというのをお願いしていきたいです。

杉谷: 皆さんから、いろいろとお話を伺ったんですが、今回の会議は別に答えが出るものではないと思いますので、それぞれの意見を刺激にしながら、今後、やっていきたいと思います。

ここ最近、ふるさとを知るための授業やジョブフェア的なものが稚内でも増えてきたと思います。それは悪いことではないですし、我がふるさとはこんなに素晴らしいと叫ぶことも悪いことではないんですが、それが果たして、住み続けるための理由になるのかというと、直接的には難しいと思いますので、それ以外のところを考えていかなければいけないだろうと常々思います。答えは出ないんですけども。

高校生たちが勉強したいから進学したい、都会にも行きたい。そういう当たり前の欲求を止めることはできないんですけれども。例えば、実際に移住してきた方、あるいは転勤族の方の話を高校生が聞く機会。実は少ないのかなと思うんです。僕は立場的にロータリークラブの社会人講話などに行くんですが、地元の人が地元のことを話すことはたくさんあるんですけど、転勤族や移住者の話を聞く機会は学生は少ないと思うので、そういう機会をつくったらどうかなど。

Uターンの話もたくさん出ているんですが、今、上川の東川町はすごく人気があって、活気があって、僕も2回ぐらい遊びに行ってるんですけど。稚内に比べると、小さな町ですけど、人口が増えているんです。定住移住サイトはどこの町にもあるんですが、東川町のホームページを見ると、まず最初に移住者の YouTube が貼ってあるんです。若い夫婦とお子さんの家族 3 人が並んで、幸せそうな、楽しそうな、そういう YouTube がたくさんあって、移住者のインタビューがまずそこにあるんです。

その下に東川町のイメージ映像があって、空き家情報もただリンク飛ばすだけじゃなくて、ちゃんと町が選んだ家があったりするんです。実際、東川町って、すごく移住者が多くて、さっきの田中さんの話じゃないですけど、家さえあれば、ちょっとしたカフェをやったり、ものすごい狭いスペースで蒸しパンだけを売ってるお店も移住者の方なんです。蒸しパンでどうやって商売するんだろうって思うんですけど、きんぴらごぼうが入った蒸しパンとか、何十種類も並んで、それがものすごくバズってるというか、知られてる。その蒸しパンが東川町の道の駅にも売っていて、若者や移住者が非常に生き生きした生活をしてる様子がホームページを見てもわかるし、町を歩いてみてもわかるんです。

斉藤さんがいるので、申し訳ないですけど、稚内市の移住のホームページはリンクがばあっと貼ってあるだけで、そういうのが全くなかったりするんで、ちょっとイメージがしにくいのかな。せっかく稚内にもいいところがあるのに、リンク飛ばすだけだと意味がないというか、イメージしづらいと思うので、この町に来ると、戻ってくると、あるいはこの町に移住すると、なんか楽しそうで、キラキラしてる。理想論ですけど。そういうことをプロモーションしていくのもすごく大事だと思いました。

だから、若者が次々に起業できる環境や、仕事だけじゃなくて、趣味などやりたいことをどんどん実現していく姿を見せることが、次の世代の若者を呼ぶことにもつながっていくのかなと思いますので、全く答えにはなっていないですが、何かヒントになればと思います。

それでは、最後に全体を通して、オブザーバーで参加していただいている宗谷総合振興局地域政策課長の笠行さんにお話を頂戴したいと思います。

■オブザーバー 宗谷総合振興局 地域創生部 地域政策課長 笠行 崇志氏

日頃から、道や振興局の取り組みにご協力いただきまして、ありがとうございます。

私がいる地域政策課は地方創生や地域振興を担当してしまして、地域政策課以外でも振興局としては若者の地元就職の中で、オーソドックスな取り組みとしては高校 1～2 年生向けに地元の仕事を知ってもらうようなイベントを開催したり、最近では LINE を活用して、地元の企業に地元で働く方の働きぶりを若手にプッシュ型で情報発信しているような、若者の地元就職とか、いった

ん離れて、また戻ってくるような取り組みをしているところです。

特に国、石破総理がよく言われているのが地方創生 2.0 といって、今、若者や女性に選ばれる地方をつくると言っています。楽しく働いて、楽しく暮らせる地域をつくるということを言ってらっしゃるんですけども。私、今日、お話を聞いて思って、一つキーワードだと思ったのは、やっぱり仕事なのかと思って。ただ、話を聞いていて思ったのが、仕事っていうものに今の若い人たちが仕事に対する価値観をどういうふうに思っているのかが、我々の世代だと、一生やっていくような仕事のイメージがありますけど、今の若者は仕事なんて、いくらでも替えるような価値観を持っているのではと思って、若干、仕事に対する価値観を若い人に聞いてみたいと思いました。

仕事を一つ、キーワードにすると、行政的には2つ、視点があって、1つは今、結構いろんな業種で人手不足で、仕事はいっぱいある。なので、ある仕事の魅力を知ってもらって、そこで働いてもらうのが一つあって。

もう1つは、やっぱり仕事の選択肢を増やす必要があるんじゃないかと思っていて。特にデジタル技術が発達しているので、ほんとにフルリモートで仕事もできますし、昔と違って、いろんな仕事があるのかなと思って、特にIT系の大学もあるので、いろんな仕事を選択できるようなことができればと思っています。

宗谷地域は観光や農業、漁業があるので、新しい産業が生まれてくると、また魅力的な地域になるのかなと思ってますので、振興局としても、そういう取り組みをしていきたいと思っています。

杉谷:確かに仕事に対する価値観は随分変わっているような気がします。

それでは、以上をもちまして、Soya Labo10 ミーティング、終了になるんですけども、稚内開建から説明がありました通り、このミーティングに関しては来年度以降も継続していくということです。また、シンポジウムも同時に継続していくということです。また、行政機関が一堂に会する地域づくり連携会議も行われます。

本日いただいた皆さんの貴重な意見に関しては、そのような場においても継続して取り上げるなど、今日のミーティングだけで終わることのないよう、魅力ある宗谷地域のために行政機関、そして、民間で活躍されている方々が一丸となって、取り組んでいければと思います。

一番最初に説明がありましたけれども、第9期北海道総合開発計画の中には共に北海道の未来を創る、共創という言葉があります。その取り組みにつながっていけばと思います。

また、稚内開建からもお話があった通り、このミーティングの内容については後日、会議資料や動画、写真などを稚内開建のホームページに掲載するとともに、会議の内容については、市町村にも情報共有するという事ですので、重ねてお知らせいたします。

以上となりますけれども、今回せっかく、各地からお集まりいただいているので、まだ名刺交換などお済みでなければ、少し交流の時間を設けますので、興味のある話がありましたら、交流していただければと思います。

本日は大変ありがとうございました。お疲れさまでした。

以上